

無の意識とアメリカの現実

——アメリカの知識人（R・N・ベラー）の危機意識——

葛西 実

一、序 人間性の根拠としての思想

ベラーの問題意識とのかかわりは一九六七年以来ことなので、既に十年以上の歳月がたっている。その間、一貫してベラーの問題意識は問として生きてきた。これは不思議なことであるが、人間性の根拠としての思想は直接性、無境界性、普遍的超越性を特質としているのではなからうか。

ベラーの問題意識を通して生まれる思想にこのような重さがあるのだろうか。これは当然の問である。しかし思想の重さはどのようにして計られるのであろうか。思想の現実には盲目な人が、どのようにして思想の価値を計るのであろうか。思想と無思想とのきれつは深い。それは思想の証言とその否定に端的に示されている。思想の証言者に危機意識が不分離なのは、このきれつを見ても

いるのではなからうか。社会学者であるベラーが思想の証言者であることは、学問としての社会学の鉄則である客観性の枠外にたつことであり、科学的でないと判断されるが、これは妥当であらうか。学問の第一義的課題は事実の理解であって、客観性でないとするならば前述の判断は否定されなければならない。

ベラーの問題意識の中核には無の意識がある。無はベラーの思想の内実であり、無の意識は現実を見る視角である。この小論ではベラーが無を意識するにいたった過程、ベラーの意味する無の意識、その視角から見えるアメリカの現実、そこから生じる危機意識を検討したい。

二、喪失の物語——信仰の喪失と喪失の信仰

一九七〇年に出版された『信条を越えて——後現代社会におけ

『宗教論集』の序は、ペラーの知的自叙伝である。その主題は喪失であり、内容は一言でいうならば、喪失の物語である。そこに無を意識するにいたった過程が述べられている。

一九二七年、ペラーはアメリカのプロテスタンティズムを背景とした家庭に生まれた。このことをハーバード大学でマックス・ウェーバーの『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』を初めて手にした時、改めて意識している。プロテスタンティズムはペラーの喪失の物語の一つの基調である。これは日本人にとっての仏教、或は神道と対比されるであろう。

三歳にして父を失い、母の手一つで大都市ロスアンジェルズで育てられた。都会特有の根なし草のような浅薄な若者文化にあきたらなかったが、例外をユダヤ人文化に見いだしていた。それは一つのアアシスであった。そこで生涯の伴侶に出会っている。第二次世界大戦の最中、高校最終学年次に、当時のアメリカの支配的な宗教的・政治的信条に批判的になり、マルクス主義の文献を読み初めているが、その具体的契機についての言及はない。戦争の異常な雰囲気の中でアメリカの支配原理に対する批判精神が芽生えていたことは驚くべきことであるが、かなりの孤独感にうたれていたようである。

ハーバード大学は解放の場であった。孤立感、偏狭なアメリカ文化、幼児期、少年期のプロテスタンティズムから解放され、知的にはマルキシズムが同一性の所在を示した。しかしながらロシ

ヤの動向ともあいまって、マルキシズムの理論と実際の間をうめるかのように未開文化の全体性と統合、異国文化、特に日本文化の審美性、内的生活の多層性を示す精神分析がペラーの心を捉えた。学部時代の終りには、ペラーにとっての偶像マルキシズムは崩壊した。直接の具体的契機は、アメリカ社会のマルキストに対する肅清に直面して表面化した左翼的知識人の非倫理的行動様式であった。

マルキシズムの喪失を通して、大学院時代の初めには精神的空白を避けることができなかった。この時期に、かつて拒否したタルコット・パーソンズ、パーソンズを通してM・ウェーバー、E・デュルケムに目を開かれ、政治的に自由主義者となった。背後にはスターリン支配の露呈とパウル・ティリッヒとの出会いがあった。ティリッヒのプロテスタンティズム、特に『存在への勇氣』はペラーに深い感銘を与えた。

博士過程終了後、ハーバード大学講師就任の可能性をマックス・カール・シイズムの為に断念し、カナダのマギル大学イスラム研究所に特別研究員として赴任した。この研究所の所長はW・C・スミスであったが、知的自叙伝ではスミスへの言及はない。カナダの二年間の生活は、ペラーにとって不確定の低迷の時期であった。反ヴェトナム戦争の為にアメリカを去った若い人々の心境に通じるものがあつたようである。この時期にペラーを支えたのは、ティリッヒとの出会いを通して芽生えたキリスト教理解の展開と結実

であつた。それは罪の実存的理解であり、特定の組織や人間への偶像崇拜的盲従をつくりだし、その結果として自己義認を助長していた文化的キリスト教やマルキシズムの否認であつた。

一九五七年、ハーバード大学に帰り、一九六七年迄の十年間、ハーバードで教育、研究に従事している。この間の基本的姿勢は自由主義であり、それを最も端的に示したのがこの時期の終り（一九六六年）に書かれた「アメリカにおける市民宗教」であつた。この論文では価値の最も自己批判的形式をアメリカの中核的価値として確認している。それは一言でいうならば、市民として、国家として超越の神を第一義とすることであり、個人と国家が自己目的化することは許されなかつた。このような価値意識の共有が市民宗教で、今日迄学際間の論争点として依然として究明されている。

リベラリズムを基調としたこの時期の研究には悲観的楽観主義ともいうべき色彩があるが、それはペラーの研究の理論的枠組みの試みとしての「宗教的進化」における歴史の進化論的図式に明らかである。ペラーは批判的近代化論者で、アメリカを先進的で近代化の先端になつてしていると判断していた。その前提は、近代社会は前近代社会に比較して相対的に問題が少くないことである。アメリカは経済成長、政治的安定の面で問題をかかえていない後進国に対する一つのモデルであつたのである。

しかしこのような前提、それを支えている視角としてのリベラ

リズムは、根本的に再検討を要求されることになる。歴史的方向の不確定性という事実が契機であるが、直接の要因としては人種差別の不正、大学共同体の自己破壊的混沌、ヴェトナム戦争の激化、想像力の文化があげられる。近代社会のモデルとしてのアメリカの権威は崩れ、その破れの中から、後進国とは異なるが、自己破壊につながる深刻な問題をアメリカがかかえていることを明らかにしたのである。それは楽観的進化論の可能性を疑わしいものにした。このような自覚を背景にして、一九六七年、ペラーはハーバードからバークレイに移っている。ハーバードの権威ある安定に対して、バークレイの予断を許さない混沌を選んだのである。

バークレイに移ってからの視角は喪失の信仰である。喪失の信仰を通して、無を意識している。それは、ペラーが知的遍歴の過程で見いだした最も深い真理であつた。無は一切の可能性であり、自由の源泉である。それは抑圧体制としての軍隊、不当な経済体系だけでなく、現実主義、必然性の下に破壊の道を辿らせる死のイデオロギー、全体主義を拒否する。信仰の喪失を通して生まれた視角としてのリベラリズムの特質は悲観的楽観主義であるが、喪失の信仰のそれは楽観的悲観主義である。無の豊かさとしてと対照的な現実の自己破壊的混沌を鋭く意識しているのである。しかしながらこのような後現代的様相においても、プロテスタント的個人主義と自発的自主的社会的組織は、意味のある歴史に参与す

るには不可欠であると信じているが、そのような意味で宗教改革のモデルは依然として生きていたのである。

失なわれた父、失なわれた宗教、失なわれたイデオロギー、失なわれた国家としてペラーの喪失の物語は展開したが、それは信仰の喪失にとどまらないで喪失の信仰となり、無を意識するにいたった。ペラーの知的自叙伝では、無を意識しているという事実の指摘にとどまり、それについての詳細な説明はない。

三、深淵としての無

知的自叙伝と殆んど同じ頃に書かれたと思われるペラーのノーマン・O・ブラウンの『愛の体』の書評では、主として近代化の分化過程によって相互の関連性を失い、分裂した文化の統一性・統合性の基盤としての無意識とそれを意識する無意識的意識としての象徴的意識を問題としているが、それらはペラーの知的自叙伝の無と喪失の信仰と同一の現実を指し示している。無意識は「われわれを此方にもたらした無窮の海」であり、象徴的意識は「霊は霊を通して理解される」ことであり、それは人間としての自己理解である。象徴的意識は、宗教の偏狭性、宗教的象徴の偶像崇拜的私物化、直訳的解釈、歴史的次元への矮小化を否定する。知的自叙伝から二年後に書かれたと思われる「帰るべき道なし」(No Direction Home)は副題が示しているように、アメリカの危機の宗教的側面を検討しているが、そこで焦点としてと

りあげられているのが無の経験である。この無の経験からどのような現実が見えるのであろうか。第一に崩壊の可能性をはらんだアメリカの危機である。それはマックス・ウェーバーの鉄の檻の現実であり、成功のイデオロギーの下における死のすじみちである。しかしながらアメリカには予言者の宗教の活力は依然として残されていることを対抗文化の批判に対してペラーは指摘している。第二にアメリカの宗教的伝統、文化的表現の基底には無の経験があることである。それはアメリカが必要としている和解と再生の可能性、真正な多様性への鍵、人間の意味の根源を示している。無の経験は、アメリカの危機は政治的、経済的、社会的問題のみならず根源的には人間の意味の問題であることを明らかにしている。第三に、無の経験は一切の宗教的伝統の根源にあって、それらの個別性を否定するのではなく、それらの歴史的限界を超越する可能性を示している。

このように検討してみると、無と喪失の信仰、無意識と象徴的意識、無と無の経験は対応し、ハーバードからバークレイに移る契機となった無の意識は一貫してペラーの心を捉え、その視角から現実を批判的に見ていることが明らかである。その過程で危機意識はより鮮明になり、突破口としての無の経験は焦点となる。

このような意識は一つの広がりを含んだ今日のアメリカでもっていることを、ポプ・ディラン、ゲリー・スナイダー、ミカエル・ノヴァク、ハーバート・フィンガレット、ノーマン・O・ブラウン、ワ

レス・ステイヴンズを検討しつつ指摘している。ペラーはこのような広がりや歴史的にも、世界的にも見ているのである。

このような無の意識から、一九七三年の「アメリカの現実についての省察」の深淵としての無の意識にいたる迄には、もう一つの喪失、個人的悲劇に直面しなければならなかった。それはカリフォルニア大学バークレイ校に在学していた令嬢の自殺であったが、ニクソンを指導者を選んだアメリカの社会的悲劇とは無関係でなかった。その苦痛はあまりに深く半年の間、公の場でペラーは語る事ができなかった。冬のイメージで初まり、夜のイメージで終わり、未来について語るべく多くのことはないという「アメリカの現実についての省察」は、長い沈黙の後の最初の講演であったが、絶望の苦しみからしばらくりだされたものであり、ペラーがアメリカの危機のただ中におかれていることを物語っている。この講演の背景には、ペラーの苦悩にくだかれた日々がある。

この講演の目的は、ペラーの一人の社会学者としてのアメリカの危機への応答の試みであるが、それは同時に一人の宗教研究者、市民、父親、人間としてのアメリカの危機への応答である。ペラーは社会学者の基本的課題は、単に知識の為の知識でなく、宗教的、倫理的、政治的に正しい行為の為の共通の理解を明らかにすることにありとして、知識の為の知識という立場とは一線を劃している。

ペラーは応答として一体何を提示しているのであろうか。一言

でいうならば、それはワレス・ステイヴンズの「そこに無いものではなく、ある無を」(Nothing that is not there and the nothing that is)である。「そこに無いものではなく」は現実があるがままに見つめることである。ペラーはここで、アメリカの市民宗教を歴史的に検討している。アメリカの市民宗教は、アメリカの自己理解の基本的枠組みとしてのアメリカの意味、エートスを包含している社会理念である。アメリカの市民宗教は、一六三〇年のマサチューセッツ湾植民地組合教会員の最初の指導者ジョン・ウィンスロップのボストン上陸直前の偉大な船上説教に、その理念の古典的原像を見いだすことができる。それは神の栄光の為、具体的には神への服従、神の愛を根本にした一つの体としての兄弟愛の共同体、古いバビロンであるヨーロッパに対しての新しいジェサレムとしてのアメリカの形成であった。

この理念は一七四〇年代のジョン・エドワーズによって代表される第一次大覚醒運動に継承され、アメリカの政治的独立として結実したが、ここにアメリカの市民宗教の基本的リズムの原型である宗教的次元における回心・契約・審判、政治的次元における解放・憲法・自由が確立した。十九世紀前半の第二次大覚醒運動は、第一次のそれが新約聖書の自由の約束の成就としての新しい共同体への宗教的待望を生みだし、国家的共同体の創建への道を整えたように、個人の回心を通してより良き共同体形成を意図し、国家共同体の理念にとって最大の汚点であった奴隷制度廢

止の爲の運動を促進し、南北戦争とその帰結としての法の下の平等を明記した憲法修正第十四条成立の背景となった。このような市民宗教の展開において十九世紀中葉の偉大な思想家、ソロー、ホーソン、メルヴィル、ホイットマンはかつてウィンスロップやエドワーズが果たしたような役割をになうことになった。

しかしながらこのような市民宗教のリズムのただ中で、それを根本から否定するような貪欲を中核とした世界像が、産業資本主義の形成・展開を通して支配的となった。二十世紀にはこの傾向は、私的・公的官僚制の確立、マス・メディア、大衆娯楽の発達を通してさらに顕著となった。マス・メディアと大衆娯楽は功利主義的、搾取的社会の支柱・エネルギーとなったのである。このような動向の中において十九世紀末から二十世紀初頭にかけての市民宗教の改革運動は無効であった。一九五〇年代後半の市民運動、一九六〇年代の平和運動、文化革命的運動に市民宗教が継承されているが、それ自体の問題もあって、市民宗教の理念を真向から拒否する貪欲の世界像を委ねることはできなかった。結果としてアメリカは、冷酷な貪欲と飽くなき物質的蓄積を公的に偶像化する社会に生きており、それは経済・政治だけでなく、家庭、学校、教会などを含めてすべての制度を侵害しているのである。アメリカの市民宗教の契約は破られたのである。アメリカの市民宗教、市民社会、共和制の崩壊は架空のことではなくったのである。

このような危機の時、アメリカの現実の底にある、いわばアメリカの現実の根源としての深淵を見つめること、深淵に耳をかたむけることをベラーはすすめる。この深淵が「ある無」(the nothing that is)である。この深淵をアメリカは見ることを拒否してきたが、アメリカの歴史の基調として存在し、一貫して語りつづけてきているのである。それは少数者の敗北の経験——アメリカの市民宗教のない手の罪意識、少数民族の言葉にもならない苦しみのだん底からでてくるうめき声、そして十九世紀以来の商業消費文化によって根をたたれ、荒廃したアメリカ社会に深淵を見る少数の作家、詩人——を通して具体的に示されているのである。

ホーソンは一八五九年、南北戦争の直前に「どこでも横たわる暗黒のみぞ」について語っているが、それはベラーの深淵と重なる。

人間の幸福の最も確実な実体は、その暗黒のみぞを覆っている外皮にしか過ぎない。その外皮は、われわれがそのただ中を踏み歩く幻影のような舞台背景を支持するに足るだけの現実性しかもっていない。深い割れ目を開くのに地震は不要である。普段よりほんの少し重い足取りで足りるだろう。だからわれわれは、その皮相を突き破ってしまわないように、常に非常に繊細に歩まなければならないのだ。しかし徐々に、われわれは不可避的に沈んでゆく。

四、歴史意識の三つのレベル——一つの結論

ペラーは、「今こそわれわれすべてにとつての深淵、個人的・社会的深淵、そこにある無を見つめる時である」と主張する。その過程で、「あらゆるごうまんも、あらゆる権力も、あらゆる富も与えてはくれなかつた知恵を見いだすことができるであろう」と自らの経験を背景にして述べているが、それは課題意識につながる。

われわれはそれ（建国二百年祭）を国家的哀悼と悔い改めの年にすべきであろう。依然としてそれを、二百年前に始められた未完の革命の遂行に自らを献げる機会にすることも可能だろう。われわれは最近の苦難の中で、少なくとも少数の人々は今なお市民道徳によって行動しているのを見てきた。今ならまだ、アメリカ人がかくも長い間待望してきた兄弟愛に基づく共同体を創設するのに遅すぎはしないだろう。それも今や、誇りよりも謙遜をもって……。

しかしその展望は不確定で、明るくない。

望みに関しては、私は多くのことを語りえない。むしろ、われわれの冬の季節の長い夜がなお一層長く続くこととする時、私にはイザヤ書第二十一章の次の言葉が浮かんでくる。

「夜回りよ、今は夜のなんどきですか。」

夜回りよ、今は夜のなんどきですか。」

夜回りは言う、

「朝がきます、夜もまたきます。」

もしあなたが聞こうと思うならば聞きなさい、また来な
よ。」

ここまで検討してみると、ペラーの歴史意識に三つのレベルがあることが明らかであろう。第一は宗教を否定したマルキシズム、第二に市民宗教、第三に無の意識である。これはミルチエ・エリアーデの歴史主義、宗教的構造、普遍的に妥当なエキメニカル・ポズィション、⁽¹⁾ ウィルフレッド・カントウエル・スミスの伝統、信仰、人間性の根拠としての信仰に対応する。第一のレベルにとどまるかぎり、それは人間性を破壊することになる。第二のレベルは、第三のレベルの意識なしには形骸化して、宗教という歴史的権威にもかわらず第一と同じ役割を果す。第三のレベルは人間性の根拠に根づいた視角である。今日の悲劇は、第三のレベルの歴史意識が無縁となっていることであろう。

(1) R. N. Bellah, *BEYOND BELIEF—Essays on Religion in*

a Post-Traditional World (N. Y. Harper & Row, 1970)

(2) 同上 pp. xi~xxi. R. N. スミサー、葛西・小林訳『宗教と社

会科学のあいだ』未来社、一九七四年十二月、九一—三頁。

(3) 同上『Civil Religion in America』pp. 168~189.

(4) 同上『Religious Evolution』pp. 20~50.

(5) 同上『Review of Love's Body, by Norman O. Brown.』

pp. 230~236. 『愛のかた』四三一—五十六頁。

- (9) R. N. Bellah, "No Direction Home—Religious Aspects of the American Crisis" The Dudleian Lecture, Harvard Divinity School, 18 November 1970.
- (7) R. N. Bellah, "Reflection on Reality in America." Mccall Memorial Lecture, First Congregational Church Berkeley, California 4 November 1973.
葛西・小林訳「アメリカの現実についての省察」『思想』一九七六年三月、三五二—三六七頁。
- (8) 同上 七七頁。
- (9) 同上 七八—七九頁。
- (10) 同上 七九頁。
- (11) Mircea Eliade, *Myths, Dreams and Mysteries*, (London, Collins, 1970)
- (12) Wilfred Cantwell Smith, *Faith and Belief* (Princeton, Princeton University, 1979)
- (カネラ・みのる、インディアナ思想史・宗教史・比較宗教学、国際基督教大学教授)